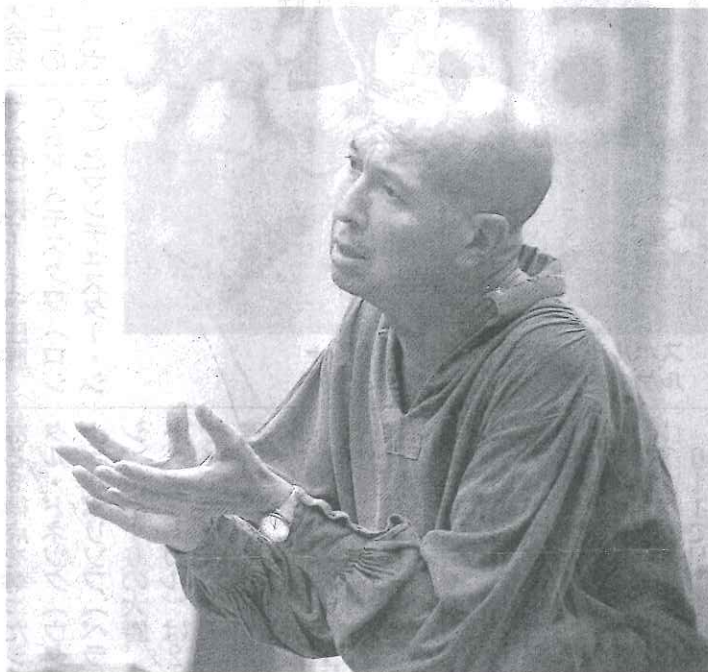


# 井上道義 復活の第一楽章



23・24日 大フィル 定期演奏会

咽頭がんを公表し、活動を休止していた指揮者井上道義が帰ってきた。体重は10kg減って言葉はかすれ気味。「すっかりじじいになった」と本人は言うが、変わらぬ存在感で大阪フィルハーモニー交響楽団とのリハーサルに臨んでいた。

入院は5月下旬。放射線治療を繰り返す、一時は水も飲めず、胃ろうも経験した。百日せきを併発し、中耳炎にも。聞こえないし、話せない。このつらく惨めな状況で、音楽は助けにならなかつた。楽譜もキーボードも病室に持ち込んでいたが、触れる

気力もない。「がっかりしちゃった。音楽とはそれだけの付き合いだったのだから」

苦しい闘病の一方で、うれしい出来事もあった。かつて音楽監督だった京都市交響楽団は千羽鶴を、今春から首席指揮者を務める大フィルはファンの寄せ書きを送ってくれた。療養していた伊豆の別荘には、指揮者仲間の尾高忠明や佐渡裕がやって来た。

「年がら年中オケとけんかしていた」と井上を評する音楽関係者は少なくない。が、同

じくらしい愛されていたことがよくわかる。

「指揮者って、年をとるとみんながちやほやする。その環境にごまかされずに立たないと」。67歳のいま、改めてそう思う。

今後は仕事量を抑え、一つ一つを大事にしていく。だが始まったばかりの大フィルとの関係性は、これまで以上に深めるつもりだ。

「大阪のお客さんは街で会うと触ってくるんです。東京じゃありません。俺もそういうの、嫌いじゃないからね」。そして、大フィルにはラテン系の明るい曲が合うと確信している。「なにもブルックナーだけじゃないだろうって思いまよ」

どうしてもやりたいことが二つある。父の人生をたどる自作オペラを完成させることと、劇作家野田秀樹と組んで「フィガロの結婚」を成功させること。でも、一番したいのは「別荘でのほんとした隠居暮らし」。もっともしばらくは無理そうだ。

大フィル定期演奏会は23、24日のいずれも午後7時、大阪・中之島のフェスティバルホール。チャイコフスキーの交響曲第4番、プロコフィエフのピアノ協奏曲第3番ほか。6千540円。大阪フィル(06・6656・4890)。

(谷辺寛子)